

漱石における「明星」的なもの

— 初期作品を中心に —

池 谷 直 美

序

「吾輩は猫である」第一編（明治三十八年一月「ホトトギス」以後「猫」と略称。）に、猫が主人について語るところがある。猫の口を借りた作者が、主人化—苦沙弥化—された自分を語るのだから、かなり戯画化された主人像と見るのが普通だろう。

△何といつて人に勝れて出来る事もない▽くせに、△何にでもよく手を出したがる▽と、小馬鹿にした口ぶりで猫があげつらうのは、主人が日頃△胃弱の癖にいやに熱心▽にやっている趣味芸事のいろいろである。△俳句をやつてはとぎすへ投書▽するかと思えば、△新體詩を明星へ出▽す。英語教師だというのに△間違ひだらけの英文▽しか書けないようでは、どちらも大した出来ではなさそうだ。さらには△弓▽に△謡▽に△ヴィオリン▽と和洋新旧とりまぜて、時には△ワットマン▽紙を買い込んで当時流行のスケッチに励んだりもするのだが、超人ならぬ凡人の悲しさ、△氣の毒なことにはどれもこれも物になつて居らん▽。

現実の漱石が果して△物になつて▽いたかないかは別として、

漱石における「明星」的なもの — 初期作品を中心に —

採りあげられた種々の事物は、実際に彼が手を染めたものであると言える。中でも俳句は、知友子規の生前から共に親しんだものであり、英国留学中、また帰国後も折にふれては創られていた。とは言え、子規や虚子に誘われて「ホトトギス」に寄稿した事はあつても、一般読者のように△投書▽した事はなかつたろうから、虚構が加味されているとも見えよう。しかし、△謡▽や△弓▽やスケッチと並んで、作者の実生活からの反映であることは確かだと言える。すると残るのは△ヴィオリン▽と△新體詩を明星へ▽のくだりである。

鏡子夫人の「思い出」以来、漱石の△謡▽はどうも余り上手な部類ではないことになっている。それに従うならば、この△ヴィオリン▽は大いにハイカラぶつた虚構と考えていい。おそらく「猫」第十一編の寒月のヴァイオリンのように、周囲の弟子、知人等からヒントを得たものであろう。最後に残るのは、△新體詩を明星へ▽である。

第一章

漱石と「明星」派とは、従来ほとんど無縁のものとして考えられ

て来た。その出発点は、さかのばれば、明治三十八年一月の、「漱石と柳村」(読売新聞連載。一月二十日―二十三日)になるだろう。XYなる匿名の人物―正宗白鳥―の筆は、冒頭を次のように起している。

ホト、ギスといふ小雑誌あり、明星といふ小雑誌あり、一つハ體酒の如く、一つはラム子の如し。どうせ滋養にはならねど、いづれも特色のありて小範圍の讀者に珍重せらる。この二者ハ全然相容れざる性質を有し、寄稿家も讀者も類を異にし、明星の後援者に上田敏先生あり、ホト、ギスの客將に夏目金之助先生あり。自から相對立して、大學の講堂外に自己の面目を發揮せるハ面白し、(原文総ルビ)

ここだけを取り出して見るといかにも、漱石と上田敏とが並称されているかに見えるのだが、全文を通読すると、実は上田敏批判の爲の對抗馬として、漱石がかつき出されたことが明らかになる。両者の知名度が大きく異なるとして、その原因をへこれ一人ハ百万社会に知らるゝを勉め、一人ハ超然毀譽褒貶の外に遊ばんと勉むるの結果Vであると述べる。また、ハ盲目千人の世の中ハ、頻りに横文字交りの文章を片々たる小雑誌に掲げ、西洋文學を鼻の先きにぶら下げる手合を、直ちに博學者と思ひ込み、深く藏して沈黙を守れる眞正の學者を認むるの眼力なしVと、暗に柳村の博学に異議をとなえているところなどが、その証拠となる。連載の最終日、一月二十三日に書かれた、漱石の皆川正禧あての書簡ハ僕の事を評するときは誰でも必ず上田君を引合に出す上田君は迷惑なるべし。あまり讀賣で學者の様に吹聴されると大學の講堂で講義がやりにく、て

困りますVは、この記事についてのものである。もちろん本気で困っているわけではない。ハ近い身より扱より却つて知らぬ他人の方が時々買彼つてくれるものに候Vと続けて書いているように、漱石は悪い気はしていない。この一月、「猫」第一編と時を同じくして発表した「倫敦塔」(「帝國文學」)が、仲々好評であった――と言つてもハ近い身よりVの中だけである――のに、気をよくしていた最中の記事だったからである。

「漱石と柳村」は、「ホトトギス」対「明星」を意図して執筆されたものではなく、むしろ読売対帝文を意図して書かれたものであるにせよ、結果的には、当時の文壇において根岸派と明星派とが対立的に考えられていたことを伝えている。鷗外の觀潮樓歌会が開かれるのは、明治四十年に入つてからのことであるが、対立の根は、「明星」創刊当時にすでにあつた。

創刊当初の「明星」には、根岸派の作品が載せられていた。すなわち、

第二号(明治三十三年五月一日)

『俳句評釋』虚子

『病床十日』子規

第三号(同年六月一日)

『川狩十句』虚子

『雄略帝の御製』竹の里人

第四号(同年七月一日)

『俳句評釋』虚子

『短夜』碧梧桐

「夏十句」四方太

といった具合である。それが第五号では全く姿を消し、第六号（三十三年九月十二日）に鉄幹の『子規子に與ふ』が『子規子來信』と共に出されるに至って、両派が互いに相容れずと争うさまが公になる。誰が言い出したものか、同じ新派にまとめてもらっては困るといった空気が広がってゆき、「帝國文學」第六卷八号（三十三年八月十日）の「和歌壇の新派を警醒す」の一節（子規鐵幹の如きは多少成功したるにしもあれどなほ斯道の詩魔たるを免れざるべし）等が引金となって、両者が別々の道を求めるようになるのである。

この「帝國文學」第六卷八号には、「高山學士を送る」も載せられていた。すなわち、藤代素一、芳賀矢一、稻垣乙丙、戸塚機知、夏目金之助等と共に留学するはずの高山樗牛への激励文である。樗牛は結局留学せずに終ったが、この号の「帝國文學」を漱石が見ていた可能性は充分にある。明治二十八年一月の創刊号に、△高等師範學校講師大學院學生文學士 夏目金之助△が、會員名簿の英文學科學生筆頭にあげられて以来、「帝國文學」は毎月手許に届けられていたはずだからである。友人子規と並ぶ鉄幹、また「明星」の存在は、どんなに遅くともこの時までには、彼の知識の中にあつたと見てよい。——「帝國文學」第六卷四号（三十三年四月十日）には「明星」創刊の広告が載っている。——

第二章

漱石が英國留学に旅立ったのは、すでに知られているように明治三十三年九月八日のことである。留学中、日本からどんな新聞、雑誌

漱石における「明星」的なもの——初期作品を中心に——

誌が送られていたか、書簡や日記中に見える「ホトトギス」以外は判然としていない。従つてこの間の「明星」はひとまずおくとして、帰国後、漱石が「明星」に対してどのような発言を行っているかを追つてゆくことにする。

書簡において「明星」の二文字が出るのは明治三十七年六月二十九日、野間真綱あての文中、△明星の投書家杯の新體詩の主人公となり候へば少々位の病氣は我滿致すべく候△である。帰国後の教壇で知り合つた若い弟子達から「明星」の話を聞いたりすることはあつたらうし、彼等の中に「明星」投書家がいてもおかしくはない。

三十七年十月二日の、橋口貢あての書簡は、弟 橋口清（五葉）に「ホトトギス」の爲に描いてもらった挿画の礼状である。その一節に△あの畫はほとゝぎす流の畫に候明星流に無之面白く存候△とある。当時の「明星」の挿画は数人の画家によつて描かれていたが、三十七年二月号の「白鳥」「帆影」「畫家」、三月号の「孔雀」「鶴」、五月号の「海原」、六月号裏表紙の「風」、七月号裏表紙「白鳥」及び「白鳥」、八月号「花あやめ」を描いた石川寅治が、集中的に多かった。白黒のコントラストを強調した裝飾風の強い画風である。またその画題「白鳥」「孔雀」等から想像されるように、アール・ヌーヴォー色の濃い画風であつた。「明星」の挿画は、石版、木版、色刷等の凝つたものが多く、またそれが特色になつてはいるのだが、この書簡に語られる△明星流△は、対する△ほとゝぎす流△と比較した場合、寅治あたりを指していると考えるのが至当であらう。

対する「ホトトギス」第八卷一号（明治三十七年十月一日）の五葉の「走馬燈圖案」と「奈良みやげ」は、寅治と比較すると全く画

風を異にしている。前者の図案はただしもデザイン的だが、画題の内容は、三日月の下、馬子のひく馬の背にゆられる旅人と、荷をかついで従うお伴、という俳句の季題風。後者は、興福寺遠景、春日大社の鹿、雛のスケッチといった絵葉書風、となつてゐる。「ホトトギス」同号に漱石は、へなげし浮世に戀あらはゞに始まる俳體詩、「富寺」と題した作句四句等を出し、また次の八巻二号には虚子との俳體詩「尼」を載せるなどしている。いわば、漱石が句作に熱中していた時期である。この時期、つまり「ホトトギス」に大いに肩入れしていた時の書簡が、ここにあげた橋口貢あてのものである。へ先日虚子と連句をしたる時丁度あの様な句を詠みましたと続けて書いているのは「富寺」を指しているのだろう。「猫」はまだ執筆されてゐない。後に五葉は「猫」と「漾虚集」の装釘で、斬新で見事なアール・ヌーヴォーの雰囲気を作り出して漱石を喜ばせるのだが、この時点では、漱石の側にそのような意識はなかつたようである。

『猫』第一篇が「倫敦塔」「カーライル博物館」(明治三十八年一年「帝國文學」と「學燈」)と共に世に出、先にあげた「漱石と柳村」が人々の目にふれた後一週間ほど経つた、三十八年一月三十日の寺田寅彦あての葉書に、また「明星」が出てくる。寅彦から送られて来た絵に対しての返事だが、へ傑作到着とふざけ半分に分書かれてゐる。絵のほかにも文も送つたらしい。それに対してへ文章は明星派の系統を引く。いやはや。夫より飯田河岸の事でもかかげいゝとけなしている。ロマンティックな創作よりも写生的小品でも書け、という意味であるらしい。ひやかし半分の文の中に、批判

的ながらも出てくるほど、「明星」に対する関心が高まつてゐる。「明星」的なものへの嗅覚が強まつてゐる、と考えられるところである。

三十八年三月に入つてすぐ、四日の野間眞綱あての手紙は興味深い。四月に出る「ホトトギス」百号記念号の「幻影の盾」に寄せられた「盾のうた」の礼状であるが、その後が続く部分である。へ傳四丸一日——翌五日の伝四あての書簡では満一日となつてゐる——をものし候よし。明星と七人は喧嘩をはじめめる由。柳村宅で文士會合の節白鳥來り候よし／栗原古城といふ先生も其席上にありし由白鳥をひやかしたかどうだかあやしきもの也この消息が誰からもたらされたか判然としない。「明星」又は「七人」に近い人間であり、柳村宅の文士會合の場に居あわせた者と思われる。この頃漱石宅に出入した弟子達の中で、「明星」「七人」系に位置していたのは野村伝四だが、彼である証拠はない。が、へ傳四丸一日をものし候よしへの一文から考へて、あり得るだろう。或は生田長江の可能性もある。へ明星と七人は喧嘩をはじめめる由は、一日発行の「明星」を見た伝四によつて伝えられた可能性と、漱石が「明星」を見た可能性と、「七人」を攻撃した「明星」の「七人」の野人語」が長江によつて書かれてゐるから、という理由と、三つの経路が考えられる。三つのうち、第二の場合は、ある程度の日数は限定できる。すなわち発行日の一日から十日までの間である。十一日の消印を持つ大谷正信(繞石)あての書簡はへ拜呈明星御親切に御送被下難有存候に始まつてゐる。へ早速教師の一日と申すのを拜讀致候へが続く。これは繞石が乙女生の名で書いた「教師の一日」中、へ机邊

の書冊を架上に納めて、ホトトギス二月號を讀む。先生は有難迷惑かも知れぬが、僕は漱石先生を非常に敬慕して居る。先生も教員生活が嫌ひだといふことだ。僕は何となく嬉しい。續「我輩は猫である」も頗る面白い。Vの一節を見たことを指している。しかしながら「明星」には柳村宅会合の記事はないから、八明星と七人は喧嘩をはじめぬ由Vは、誰かの口によって漱石の耳に達したと見る方が順当であろう。

六月二十七日の伝四あて書簡は、伝四の作品が虚子から文句をつけられたことについて漱石に泣きついてきた手紙への返信である。漱石はこの手紙の中では虚子側につき、若い弟子の漫心を諫める態度をとっている。「ホトトギス」の文学観について述べたところを引いてみよう。八ホト、ギスは方今の文壇で獨毛色のちがったものである。明星其他の文章家から見ればホト、ギスの文章は文章でないかも知れないがホト、ギス連から見ると明星派は又文章にならないのである。レトリック許りだと思つて居るかも知れぬV。このようなりとりは、翌三十九年二月にも行われた。伝四の「一昔」について八四方太が失敗だと申し小山内が傑作だと申ししたので君大に感ふのは尤もだV(二月二十日消印の伝四あて書簡)と評すところである。漱石は両者の差異を見きわめて、右は右、左は左と認めていたようである。そして前の手紙では八僕はどつちがいくとも云はぬV、後では八僕はどうかと云ふと自分でもわからないVと伝四に向つて言っている。つまり、漱石は自分の中に、八俳句をやつてはとどきず、八投書Vする面と、八新體詩を明星へV出す面と、二つが共存しているのを認めているのである。

漱石における「明星」的なもの — 初期作品を中心に —

後の手紙の明治三十九年二月という時は、ちょうど後に『漾虚集』に収められることになる七つの短編が完結したその翌月になる。「猫」と『漾虚集』とは、大きく色合が異つてはいるがどちらも漱石の内から生れたものである。「猫」が虚子によって、又は「ホトトギス」によって生れたものであるとすれば、『漾虚集』は「明星」によって生れたものであると言えるのではないだろうか。

たしかに漱石は、当時の新體詩には批判的であつた。それは、例えば談話「みづまくら」(明治三十八年八月十五日「新潮」)に語られているように八どの作り振りを見ても入口は一つで、中頃から枝が出たやうに、あちらへ岐れこちらへ岐れるといふ迄で、其筋道は大抵おんなしVであるからという理由による。また、恋をやたらとふりまわすようなものは八くだらないVと片付けている。だが、批判的ではあつても否定的ではない。八鐵幹といふ人は旨い。それに餘程才があると思ふVと、子規が聞いたら文句をつけそうなことも言っている。同じく談話「夏目漱石氏文學談」(明治三十九年八月一日「早稻田文學」)でも、八今少し何とか工夫のありさうなものだVとか、八今少し自由に、遺憾なく、十分にセンチメントを歌つて見られさうに思ひますVと述べたり、もう少し何とかなつていけば充分に満足するやうに見える。手放して褒めもしないが、戦鬪的に否定もしない、だからといって全くの無関心でもないといった態度なのである。

それでは、俳句の方には全面的に賛成であつたかといへば、決してそうではない。同じような態度は、虚子や四方太達の写生文の行き方、考え方に対する自己の考えを述べる場合にもあらわれてい

る。これについては拙稿「漱石と写生文」(「新樹」第一輯昭和五十三年三月一日)にすでに述べているので、詳しくは述べないが、『草枕』(「新小説」明治三十九年九月一日)を激賞した鈴木三重吉に於てた書簡(三十九年十月二十六日付)で、はつきりと八かの俳句連虚子でも四方太でも此點——自分のウツクシイと思ふ事ばかりかいて、それで文學者だと澄まして居る(文中より引用)——に於ては丸で別世界の人間であるVと、その一面的な行き方を批判しているところなどで理解できるだろう。

つまり、漱石の内では、「ホトトギス」にも「明星」にも完全に満足して一致することはできないという意識があったのである。完全に満足できないかわりに、どちらにも重なってゆける部分があった。それが一方には「猫」、他方には「漾虚集」、という形で表出したのだと思われるのである。

第三章

当時、「明星」は漱石をどう見ていただろうか。明治三十六年九月に出た『寫生文集』(俳書堂)には、『倫敦消息』が収められていたのだが、評は出なかった。先にあげた漱石の「教師の一日」あたりが、おそらく最初のものであろう。「ホトトギス」に「猫」が出た直後の反応である。

三十八年八月一日の「明星」には、明らかに漱石の「猫」の影響下と思われる小品「猫」がある。作者は△なながしVという筆名のみで誰だか判然としないが、書き出し△私は玉様のお氣に入りの「三毛」で御座居ますVなどからして、漱石の「猫」第一篇冒頭に

よく似ている。仔猫の口から飼主の少女との交流や出来事を語らせる方法も、「猫」を踏襲しているといえよう。

三十八年十月一日号の巻頭には「ふじをの君に」と題した評論がある。沙上行人という筆名で、これも誰だかわからないのだが、九月の「中央公論」に出た「一夜」をとりあげて、△之を小説と云はむも美文と呼ぶも小生の勝手に候へども、何と申しても作者の意には、充たざるべければ、態とひろく散文と申し置くVと言ひ、「一夜」の位置は△讀者が作者の操る奇しき糸に誘はれて、瞬時或る幻境に彷徨ふを得ば則ち作者の本意なるべくVというところにおく。△わからんでも感じさへすればよいのだVという漱石(九月十一日の中川芳太郎あて葉書)の意図をよく汲んだ評だと言えよう。三人の男女の会話、場面の雰囲気、味わい等の△感じVに力点をおいた評価である。虚子に対して△あれをもつとわかる様にかいてはあれ丈の感じは到底出ないと存候V(九月十七日書簡)と書かねばならなかった漱石にとつては、沙上行人は良き理解者であった。しかし△作者にして之れを人生に結び付け、之れを以て人生の批評なりとせらるゝに於ては、小生は未だ俄に首肯し難きもの有之Vと、結末部に疑問を呈している。この疑問はむしろ当然と言うべきで、△感じVをぶつ切り断ち切る結末であるから、△感じVに△彷徨ふV_{さまよ}っていた者としては、そう言わざるを得ない。全体的に、この「ふじをの君に」の漱石評は、好意に満ちている。△この作者の如き人が、この種の作品に筆を染めらるゝは、小説に對しても眞面目なる態度を以つて筆を執る者ありと云ふ事を世に示すだけにしても、大に小生の意を強うするもの有之候Vとまで、褒めあげているところ

など、白鳥の『漱石と柳村』のように、何か意図があるのではないかと、疑いたくなるほどである。案の定、十月十日の「帝國文學」第十一巻十号に、『明星の沙上行人に答ふ』（鸚鵡公）が出た。対して十一月「明星」には『帝國文學の鸚鵡公君に答ふ』が出、沙上行人は漱石を△夏目先生▽と呼んでいる。門下の弟子の誰か、又は学生の中の誰かと思われるが確証が未だ得られないのが残念である。

「一夜」が出てから、「明星」は漱石に注目しだす。三十八年十一月（日付不明）には、△先日梨雨君來訪明星に何か書いてくれと申され候是も多忙にて乍不本意斷り申候▽と皆川正禧に書いているように、高田知一郎を通じて執筆依頼をしている。梨雨は「明星」「帝國文學」等に新体詩を多く出しており、先の『みづまくら』で漱石が酷評した新体詩の作者その人である。この月の「明星」には、前述の沙上行人の鸚鵡公あての文の他、『十月の新聞雜誌』評中に、「ホトトギス」の『猫』第六篇が△相變らず面白く讀了せり▽とあげられているが、その引用箇所が面白い。寒月が、苦沙弥、東風、迷亭を相手に俳劇の構想をぶつところなのである。△所へ花道から俳人高濱虚子がステツキを持つて▽、一見△陸軍の御用達▽風にあられる。女が行水している上に鳥がとまっているのを見て△大に俳味に感動したと云ふ思ひ入れが五十秒ばかりあつて▽、大声で△行水の女に惚れる鳥かな▽で幕となる、のくだりを引いて、△た、わいも無き事なれど腹をよらせる▽と評しているのだが、痛烈に虚子及びその一派を皮肉つばく揶揄した部分に、敏感に反応しているわけである。『猫』のこの部分のあとには、東風の「新体詩が迷亭

漱石における「明星」的なもの——初期作品を中心に——

からめちやくちやにませ返される場面が続き、いわば、漱石が「ホトトギス」と「明星」両者をませ返すところなのである。同時に漱石は△送籍君▽として、自分の「一夜」を△馬鹿▽の△取除け▽の作にしてみまい、自身を茶化すという離れわざをやつてのけている。「一夜」の弁解のみとはあながち考えられない巧みな配慮である。

同じくこの月には、上田敏の「海潮音」と並んで「猫」単行本上篇の評がある。筆者は平野萬野で、圈点をつけた所だけでも、次のようなものになる。△冷靜な觀察と奇警な語句とに富んだ著者が、東西の學殖と、俳味と、洒脱な言文一致とを以て、▽書かれた△珍品▽で△家庭の讀物▽として紹介するに足る、というのである。装釘、挿画にも触れ、客觀的、常識的な評になっている。この見方が、漱石に対する基本的な視点であると言つていいだろう。

続く十二月の「明星」には、漱石が多忙のためと△乍不本意▽梨雨に断わつたその十一月に出た「中央公論」の「葦露行」評が出ている。平出修は△漱石氏の「葦露行」は獨り苦心の痕見えて愛讀すべき好小品なり▽と紹介し、『三、袖』の、エレインが深夜、紅い袖を切り落し、それを手にランスロットの部屋の戸をたたく場面を引いている。序をうけて、マロリー原作を書き直す苦心のためか、△全篇の統一や、不確實なるの憾あり▽などと書いているが、別項に採りあげられた花袋訳の「キイツの詩」を、英語も知らなければ日本語も知らぬ人間の仕事だと酷評（茅野蕭々）しているのに比較すれば、△憾▽など無きに等しい。雲泥の差とも言うべきだろう。他に「新聲」に掲げた談話が引かれていたり、「日日新聞」の漱石

評を使って野の人を攻撃するなど様々にあつかわれている。おそらく漱石の作品が、笑いや知識に彩られた良識的な作品で、発言も極端な人身攻撃を一切しないおとなしいものであることなどから、引きあいに出しやすかったのだろう。このような視点は、一貫して続いている。「明星」と敵対する相手ではない、益不益とは余り関係のない相手である、と受け取っているのである。つまり学者の余技と見ている。

この十二月の「明星」を漱石が読んでいることは、野村伝四に、△傳四先生下駄物語につき明星でわる口をかいて居る御覧なさい▽と書き送った手紙（十二月九日）で明らかである。細かな六号活字に注意深く目を通して居るわけで、自分への評については無論語っていない。前年の十一月十日消印の三重吉あての手紙に△文庫といふ雑誌の六號活字がよく僕のわる口を申します……文章でも一遍文庫へ投書したらすぐ褒め出すでせう▽などと辛辣なように書いて、逆に六号活字に意識的なところが出て居ると、同じことである。

三十九年二月号では、「趣味の遺傳」、四月号では「猫」第九篇が、面白い、の語のもとにとりあげられている。

三十九年五月号には、「小説『破戒』其他」として、晶子の「坊つちゃん」評がある。「ホトトギス」四月号附録の「坊つちゃん」を、晶子は△誠に〜佳いお作▽と褒め、△全體がしつくりと引緊つて▽、人物が多彩で、事件に変化があり、△すべて自然に面白く書かれている▽と評している。ここでも、△従来外に文學の本領がお有りなされて、世間からは小説家とは申上げなかつた方々——もう一人は藤村——▽が、△専門の小説家を凌ぐ程の實力をお見せな

さいます▽ものだと、受けとられている。

十月には、九月の「新小説」——この広告は、九月号「明星」にある——に出た「草枕」が、△世人の注意を惹いた様子だ▽と紹介され、△局部々々に描寫の新しいものがあり觀察の微に入つたものがあるけれど全體に作者の議論が續出するのは、やゝ倦厭の感を催さしめるし、文章も大分に穴のあく場所があると思ふ▽と評されている。以前に「一夜」の評で、議論的な部分に批判的であつたのと同様の見方である。△描寫△觀察▽が面白く、雰囲気が見事に出ている部分を良しとして「草枕」を見れば、必要なのは、おだやかな春の景色と春の感覚のみであつて、画工の△議論▽などは無くとも良いのである。「明星」の側から見れば、もつともなことである。また、三重吉なども同じように考えていたらしいことは、前掲した十月二十六日の書簡に△草枕の様な主人公ではないけない▽と諫めるところから推察できる。作者漱石が△議論▽に力点をおいていたにせよ、「明星」も「ホトトギス」も同じような見方しかしていなかつたのである。漱石の真意がどこにあるにせよ、「草枕」が△世人の注意▽の的となつたことは、「明星」の例をとりあげてみても、四十一年一月号の「繁簡録」（石井柏亭）、三月号の「寫眞」（古見彩虹）に出てくることからも知られよう。「繁簡録」では、△高安君▽の、常とは一風変つた人柄をあらわすのに、△高安君は言文一致はいやだ、「草枕」なども辛氣で讀む氣がしない、島崎君の『破戒』も言文一致ではなくやつて貰ひたかつた、又あまり艶氣がなき過ぎ、其前半は冗長であるなどと曰ふ▽と使われている。世評とは逆のことを言っている点が、△高安君▽の人間像を活々と表現してい

る。一方の「寫眞」は、春の日の暖かさ、高い空と薄雲、梅に鶯、陽炎といった景色の描写のあとに、△僕▽は△懐中から「新小説」を出して漱石の「草枕」の三章を読み始めた。日光の反射が強いので一頁も讀ま無いうちに眼が眩む。▽と、春の中に目を閉じる。この場面に最もふさわしいものとして、温泉宿の春に身をひたす画工が引かれているのである。

第四章

以上にあげたのは、「猫」から「草枕」に至る漱石と「明星」との表面にあらわれている相互の認識である。漱石が「明星」と没交渉ではあり得なかったことは証されたと思う。ここで再び漱石にもどって、表面に出ていない「明星」との関係を考えてみたい。

漱石が、留学前後を含めて、創刊以来の「明星」をいつから手にとるようになっていたかは、現在のところ断定できない。従ってここからは可能性として何が語れるかについて述べることになる。

小坂普氏は、その著書「漱石の愛と文学」（講談社昭和四十九年十二月二刷）の中で、「幻影の盾」と楠緒子の『くらら姫』との影響関係を論じられている。女の名の一致、クララがキリアムを△猶太人▽とからかう場面との関連——騎士が自分を猶太人と答える——など、指摘できるものは多い。さらに言えば、この『くらら姫』の初出は「明星」三十六年一月号であり、漱石帰国と時を同じくしていることがあげられる。帰朝後、目にしたとすれば、充分ヒントになるわけである。

三十六年三月号には、山本露葉の「泉の女」がある。△「魔の女」

漱石における「明星」的なもの——初期作品を中心に——

の一節▽としてあるが出典は未詳である。△山中の温泉宿▽の湯の中に放心したように身体を伸ばす自分の前に、突然湯気の中から女の裸体があらわれる。驚きと、女の身体の美しさとが、こと細かに描写される。露葉の△頸、肩、腰、曙のさうびの色にほのめきて匂ふかとばかり、地を美しうする——一度光の下に手をおけば青草を萌し、二度光の下に手をおけば花を咲かせ、三度光の下に手をおけば色彩を調ふる——春の神の眞白き膚も此の如きかと見らるゝではないか、見たまへ、二つの乳房の和膚にかゝりて、廣野の東明に臉を開く白百合の如きを——▽は、△眞白な姿が雲の底から次第に浮き上がって来る。其輪廓を見よ。△頸筋を軽く内輪に、双方から責めて、苦もなく肩の方へなだれ落ちた線が、豊かに、丸く折れて、流るゝ末は五本の指と分れるのであらう。ふつくらと浮く二つの乳の下には、しばし引く波が、又滑らかに盛り返して下腹の張りを安らかに見せる▽「草枕」七と、場面、情況と共に響きあっていると読める。現実の小天温泉での体験が、「草枕」となるまでの間に、このような小品の存在を考えてもいいたくないだろうか。さらにこの号には、各連の初めと終りを△詩は成りぬ▽で結ぶ、鉄幹の「舊人」がある。詩人擬ある人の△美しくしき多くの夢▽が、ついに△描けども成らず▽に終る漱石の「一夜」とは違つて、「舊人」の詩人の眼前の△燦たる君が繪像▽につけられる讃は△詩は成りぬ▽。鉄幹の才を認めていたことは、すでに述べた。

江藤淳氏の「漱石とアーサー王傳説」（東京大学出版会昭和五十年十二月二刷）以来、つとに有名となつたものにダンテ・ガブリエル・ロセッティとラファエル前派がある。三十六年九月号には、英

国名画として、ロセッティの「ダンテの夢」と、ウォーターハウスの「ヒラスとニムフ」が写真版でおさめられている。蒲原有明のロセッティ紹介と、石井柏亭のウォーターハウス紹介がついている。ラファエル前派については、「帝國文學」も参照しなければならぬが、ここではとりあげない。

同じ号の前田林外の「夏花少女」の一は、「夏の夜の夢」である。△錦の小蛇△の変じた少女と△毒草繁茂れる築暗△にいる△我△のイメーシは、キネヴィアの夢に通じるだろう。単行本となった「夏花少女」は、三十八年十一月、林外から漱石に贈られている（十一月五日付の書簡）。礼の中で、漱石は△全體の上に於て妖麗瑰琦の感を生じ候爲め不少愉快を覺候△と書いている。十一月とは、「薙露行」が「中央公論」に出た月である。

三十七年一月号には、梨雨の「夢なりき」がある。夢の中で恋しい女に会う、それだけを連綿とつづつたものだが、その一節、△つと、背かへして、彼方に動きそめぬ。しかも衣觸るゝ音もなく、足、疊を踏む音もなく、たゞ影の揺ぐごと、幻の去ること、寂然として君行かんとす△もまた、「草枕」に流れているかもしれない。宿屋の夜、画工の夢うつつの中に、幻のように那美が出入りする。△まぼろしはそろり△と部屋のかなかに這入る。仙女の波をわたるが如く、疊の上には人らしい音も立たぬ△（三）

三十七年十月号には、同じく梨雨の譯詩、『シャロット姫』が出る。十一月号では、「牛津——オックスフォード——だより」が、匿名者の投稿の形で出、在英の彼は、かつての漱石と同じく△「テニソン、卿とP.R.B.」の風雅を慕ひ、あるは「十八世紀に於ける英國

詩人」が音律のたへなるを賞し△していると、梧桐夏雄に紹介されている。三十八年一月号では、厨川白村によって、『女詩人クリスティナ・ロセッティ及び其母の畫像』が写真版と共に紹介されている。三月号では、兄ロセッティの詩を「いづみ」として、川上櫻翠が訳出している。

「ホトトギス」百号記念号は三十八年四月一日の発行である。同日発行の「明星」には石川啄木の「めしひの少女」がある。△ひむがしの海をのぞめる△丘の上、△白石の柱△の高殿に、盲目の少女と、若い武夫が立っている。武夫は少女の問いに答えて、海には△相思ふとづくに人の△文使乗する船△らしい△紅の帆△をあげた船が走っていると語る。高くのほってゆく太陽の下、二人は抱きあい△口吻△する。海に向う丘、大理石の柱、騎士と乙女、赤い帆の船等、「幻影の盾」末尾の盾の世界と一致する。同日発行でなければ、どちらかが疑われても仕方がないほどの符合ぶりである。両者の交流は、直接にはないから、伝聞として何か関係があった可能性はあっても、作品の内容まで伝わったとは思えない。二人の内部から生れて来たものが、共通素材の存在の可能性をも含めて、大麥近いところにあったのだと考えられるのみである。「明星」的なものの存在が、漱石の内に大きな重心を持って位置していることが、証されるのではないろうか。

可能性をさらに掘れば、楠緒子の「金時計」（明治三十三年九月号）と「虚美人草」とがつながるかどうかなど、関係はさらに深めることが出来るだろうが、以上にあげた幾つかの例によっても、漱石と「明星」との関連性は無視できないまでに深いものであるこ

とが読みとられるだろう。この稿では触れなかったが、晶子との関係、つまり女のイメージ等も係わらせることが可能であろう。また、「明星」と漱石とをむすぶ環としての「帝國文學」の存在も考慮に入れなければならない。問題提起した本稿をうけて、次の機会には、さらに視点を深めながら、漱石における「明星」の意義を、同時代の中のものとして探ってゆきたい。

△註▽

「明星」創刊の広告が「ホトトギス」に出るのは、明治三十三年六月二十五日の第三卷八号である。漱石はこれを見たかもしれないが、「帝國文學」の方が二ヶ月ほど早い。

引用は、漱石に関しては岩波版全集から、他のものはすべて覆刻版によった。